ジーンと来た

『三池ガンバレ』

メーデー 七〇カ所で訴え

第三七回統一メーデーは、晴天にめぐまれ全国各地で盛大に行なわれた。

大牟田地区は午前一〇時から笹林公園で三二、〇〇〇名の労働者、家族を結集し、三井化学の合理化反対、及びCO特別立法推進問題を中心に、文字通りたたかうメーデーがくりひろげられた。

一方、荒尾地区は市営グランドに二〇、〇〇〇名の労働者、家族が集まり、反戦・平和・生活を守るために意志を結集した。

このようなメーデーに、三池労組ガス患者家族の会は九州各県七〇カ所の会場に、合計一五〇名の代表団を派遣し、それぞれCO特別立法制定と救援カンパを訴え、大きな成果を上げた。

カンパ集約はつぎの通り

福岡県	三六四、三〇〇円
佐賀県	六一、一〇〇円
長崎県	四五、九〇〇円
熊本県	四六、九〇〇円
大分県	八三、八〇〇円
宮崎県	一二五、八〇〇円
鹿児島県	一二四、二〇〇円
合計	八五二、〇〇〇円

参加した家族の会会員は、つぎのようにようすを語っている。

大牟田メーデー会場でCO立法の斗いにカンパを訴える患者家族

拍手にボーツと

林田カズエさん（熊本県人吉市）

メーデーは駅前広場で朝九時半からひらかれました。参加者は一二〇〇名ぐらいで、各単産の前にカンパ袋を一つずつくばって回してもらいました。

三池からきたということで、大会議事の最初に組んでもらい、いよいよ訴えるときになって、舞台がわりのトラックの上にのぼったら、いっせいに拍手をされて、ボーッとなってしまいました。

予定したことを、どうやらしゃべりましたが、三池からきたというだけで、皆から激励されて胸がいっぱいになり、声がよく出なかった。

「三池さん」「三池さん」といわれて、とてもよくしてくれました。

デモの先頭に

上島千代子さん（鹿児島県伊集院）

前の日に現地に行きましたが、地区労の書記長さんが「せっかく金をつかってきたのだから、旅館に泊るのはもったいない。私の家に泊りなさい」といってとめてくれ、とても親切にしていただきました。

翌日は予定外の串木野の会場にも連絡をとってくれて、同行した銘川さんはそちらに行きました。

メーデーは八時半から駅前で三〇〇名ぐらい集まって行なわれましたが「三池から人がくるとは聞いていたが、まさか女の人とは思わなかった」といわれました。

ビラも役員の人が手わけしてくばってくれ、デモのときは実行委員長、事務局長と私の三人が先頭に立って歩きました。こんなに三池をよくしてくれるのは、結局私たちのたたかいが、好感を持たれているのだと、ほんとに心強く思いました。

慰労会にまで出席

隈元良子さん（宮崎市）

ビラくばりもカンパも心よくしてもらいました。メーデー会場では他の来賓の祝辞にはさかんにヤジがとんだり、ざわついたりしていましたが、三池の訴えにはヤジもなく盛んな拍手をしてもらいました。拍手で声が聞こえないくらいでした。熊大病院に見舞にいった人もいて、カンパに回ったときは「三池なら入れんといかん」といって入れてくれた人もいます。

最後には慰労会にまで出席しました。

今回の家族の会の行動は、労働者の連帯を強く感じ、みんな自信がついたのではないでしょうか。

陶器市で宣伝・カンパ

三川支部三小地域分会で、去る五月一日家族ぐるみの団結旅行で有田の陶器市へ行った。

参加者は四三名だったが、せっかく旅行するのだから一酸化炭素中毒立法制定を訴えようということになり、ビラ五、〇〇〇枚、タスキ、カンパ箱、携帯マイクを持って旅行をし、陶器市でにぎあう人々に訴えた。

行きがけのバスでは酒類は一切のまず、ビラを折るなどの全員の熱意がみのり、カンパ金四、八四四円を集めるほどの成果を上げた。

写真は佐賀県有田でCO立法を訴える三小地域分会員

われら五人組

(9)

「せからしか」を克服

全員出席に三年がかり

年寄りと若い者

今回は宮浦支部保線仕繰一三分会の五人組（馬渡・大砂）の皆さんに、組会議の苦労した点を話し合ってもらった。

【出席者】
鬼塚　栄治さん（組長）
谷川九州男さん（副組長）
石田　勝一さん
松永　幸彦さん
米井　和彦さん

大きい年令の差

この五人組は、出席した五名のほかに釜賀正則さん、渡辺義雄さんの二名がいるが、釜賀さん、渡辺さんがそれぞれ五四才、四五才で、他の五名は全員青年部であり年令の差が大きいことが特徴である。

青年層と壮・老年者の間では、いろいろと考え方のちがいもあり七名の組員の意志を一つにすることはむつかしい点もあった。この五人組の活動が軌道にのるまでのさまざまな問題点を、ざっくばらんに出してもらった。

「せからしか」がさきにたつ

——決めたことの実行ということもなかなかできなかったが、それぞれ家庭の用事などがあり、組会議に参加することが十分できなかった。

——若い者はハッスルしても年寄りはついていけんということで、まず、みんなで実行できる最低線を決めようということになり、職場では「自分の身体だけは自分で守ろう」ということで、坑内電車が通るときは作業を中止して退避する。人車のとびのり、とび降りはしない。長い道具類（ツルハシなど）は人車に持ちこまずに材料線で降ろしてもらう（事故のときは危険だから）。作業をするときは感電しないようにトロリー線にはビニールを巻いてする。道具を借りに行くのは繰込みのあとにすることなどを決めたが、若い者は決めた通りに実行しやすいが、年寄りは長い習慣が身について、なかなか実行できなかった。

——いまさら変ったやり方をするのは「せからしか」という気持が強かった。

——いくら五人組で決めても守らない人がいるのは、全員が会議に参加しないということと、本当に保安斗争をする意味を十分につかみとれないということが原因だった。

会議はまわりもち

——まず全員が出席しやすいようにということで、組会議は七人の家でまわりもちに開くことにした。晩めしの後なら皆がくつろいだ気持で話せるし、年とった人にも、話を聞いていた家族の人から「父ちゃん、あん人たちのいうことが本当ばい」とでもいってもらえば、ずっと効果がある。

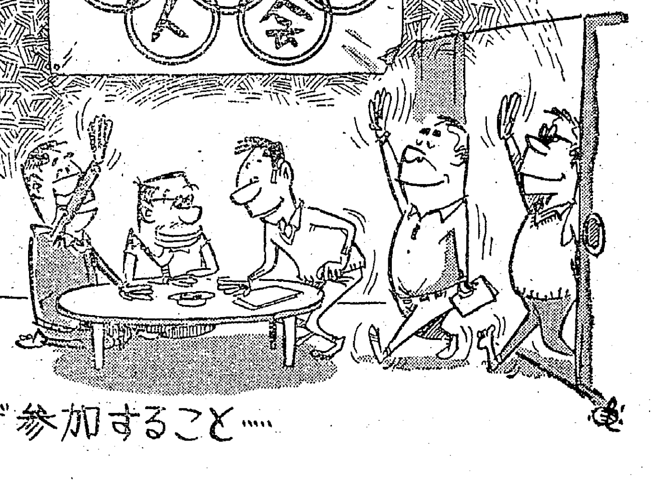
——会議のもち方も若い者がいろいろと批判するよりも、若い者だけがガンガン議論するより、横道にそれながら、みんなが話しの仲間に入れるように、組長も若い者もずいぶん話しが上手になった。

——最近では組会議には全員出席するし、決めたことは大体守られるようになったが、まず会議に全員出席するようになったことが一番の原因だ。

たとえバカ話でも

——五人組は参加することが一番だ。そして、たとえバカ話でもみんながモノをいうこと。

——七人の人間が一人一人考え方がちがうのだし、年令的にもちがいがあるのでガンガンいってハッスルしすぎてもいかん。長期抵抗でやらにゃ。



まず参加すること……

私の書棚

「赤いバリケード」

中国共産党上海揚樹浦発電所委員会編・島田政雄他訳

中国の労働者解放の重要な根拠地になった、上海発電所の労働運動史を物語りにしたもの。一九二二年から一九六〇年の社会主義中国建設までを、あらゆる人びとの話や資料を集めて集団で完成した。

「昔を思うと涙が出らあ、いま思うと夢のなかでさえ、笑い声が出るわい」という労働者大衆のいぶきがいきいきと描かれている。中国を訪れ、革命斗争の思い出を聞いた人の話では、ここのたたかいは全く三池の職場斗争に似ているという。（新日本出版社・三八〇円）

× ×

『いのちの炎は燃えて』

P・マルヴェッツィ他編
片岡啓治訳

第二次世界大戦中ファシズムに抗してたたかい、処刑されていった十六カ国の老若男女が、その死の直前に書いた書簡などを集めたもの。ベトナムや南朝鮮で、祖国のためにたたかい虐殺される人びとを思うと、この本の今日的意義を強く感じる。国別に分類、年表も添えた、親切な編集だ。（弘文堂・四八〇円）